

地域の底力——福岡県朝倉郡東峰村

厳しい苦難に立ち向かい 復興を目指す福岡県東峰村

「平成二十九年七月九州北部豪雨」は、
福岡県東峰村に甚大な被害をもたらした。
それから二年半の歳月が過ぎた今、
逆境をバネに前進をはかろうとする、
人々の熱い思いが村にはあふれていた。

東峰村東部に位置する竹地区の、標高差約160mの谷間に広がる約400枚の石積みの棚田。毎年6月には「竹棚田の火祭り」が行われ、一帯をトーチが照らす幻想的な景色が見られる。農林水産省による「日本の棚田百選」に認定された。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

人口二〇〇〇〇人の村の 経験を広く伝えて 未来に生かしたい

福岡県南東部、大分県日田市に隣接する人口約二〇〇〇〇人の朝倉郡東峰村は、二〇〇五年に旧小石原村と旧宝珠山村が合併して生まれた。小石原地区は江戸時代から受け継がれてきた陶器の小石原焼、宝珠山地区は「日本の棚田百選」にも選ばれた竹地区の棚田をはじめとする美しい風景で知られ、「日本で最も美しい村連合」にも加盟している。

一五〇〇年もの歴史がある岩屋神社、樹齢数百年の杉の巨木群、



特産品のユズ、シイタケ、米など、東峰村には数多くの宝があると語るのは、二〇一三年から村長を務める澁谷博昭氏だ。

「長年村外で勤務していましたが、幾度も故郷の景色の夢を見て思いをはせていました。いいところがたくさんあるのに、生かされていない。何とか東峰村を活発にしたいと思いい村長に名乗りを上げたいです」

澁谷氏のもとで少しずつ活性化



東峰村や隣接する朝倉市、日田市に甚大な被害をもたらした九州北部豪雨のさなか、福岡市内から撮影された巨大な積乱雲。その周囲に広がる青空を見れば、豪雨がいかに局地的に降ったのかがわかる。(写真提供：東峰村役場)

が図られるなか、二〇一七年七月五日に村を襲ったのが「平成二十九年七月九州北部豪雨」だった。九時間で七四〇ミリを超える記録的短時間豪雨で生じた土石流により三名が命を奪われ、家屋、農地、河川、道路など村全体が甚大な被害を受けた。

「台風の場合は進路や時間が大体わかるので前もって避難準備が進められますが、今回のように、過去に例を見ないほどの急激な線



JR 日田彦山線の不通区間の駅の一つで、東峰村にある筑前岩屋駅。敷地内にあり、環境省による「平成の名水百選」に選ばれている「岩屋湧水」(右)は災害の影響で一時的に閉鎖されていたが、2018年7月に利用が再開され、多くの人が訪れている。



村長の澁谷博昭氏は、「災害後不通になっているJR日田彦山線の開通に向け力を尽くしたい」と話す。手にしているのは、被災後に再建された大行司駅のあたらしい看板。駅名にちなみ、大相撲立行司の第四一代式守伊之助氏に書を依頼した。

状降水帯の発達による豪雨では、そうした事前準備の余裕がなく、まさに想像をはるかに超えた状況でした」

災害から二年以上が過ぎた現在も河川工事などの復旧作業が村内各所で行われているが、それと併せて澁谷氏が力を注いでいるのは、災害の検証とそこから学んだ経験を未来に生かしていくことだと言う。

九州大学の協力を得ながら、各地区で防災マップや、時間ごとに取るべき避難行動をまとめた



村役場近くにある「東峰村災害伝承館」では、被災時やその後の様子を伝える映像が見られるほか、全国各地から寄せられた励ましの寄せ書きなどが展示されている。



計画書（タイムライン）を作成し、連絡体制を整えた上で防災訓練を徹底。高齢者の占める割合が四二・九%と福岡県内ではもっとも高いことを踏まえ、避難所への移動が難しい場合に地区内で安全を確保できる場所も指定された。

東峰村の事例をほかの地域でも参考にしてほしい、人口二〇〇〇人の村だからこそモデル地区になり得るとの思いから、内閣府により



547年に落ちた流れ星を御神体とする岩屋神社（上右・左）。1698年に福岡藩第4代藩主黒田綱政が建立した本殿は、国の重要文化財指定。毎年4月には神輿が村を巡る「岩屋まつり」が行われる。岩屋神社内は見所が多く、「針の耳と梵字岩」（下左）には、後行者小角が彫ったと伝えられる梵字が残る。「馬の首根岩と洞門」の洞門（下右）は、江戸時代末期の山伏の手によりつくられたという。

る防災科学研究のワークショップに参加するなどして、澁谷氏は広く発信に努める。災害の記憶を風化させないために、当時の様子を伝える「東峰村災害伝承館」も設けられた。

「被害は大きかったものの、これを機にあらためて前を向いていこうと話しているんです。東峰村には祭りが数多く受け継がれていることもあり、人のつながり、すなわち地域力が残っています。なによりも、ありがたいことです」

人々の心に元気を与えた 人間国宝認定の報せ

人のつながりは、各方面でそれぞれに前向きな動きを生んでい

る。そのひとつが、江戸時代から四〇〇年にわたり続いてきた小石原焼だ。黒田藩の庇護を受けた後、水瓶や壺など暮らしを彩る民陶がつくられ、人々に親しまれてきた。かつては一〇軒ほどの窯元が、昭和三十年代の民陶ブームによりあらたな窯が生まれ、現在は約五〇軒



福岡県の陶芸家として初めて人間国宝に認定された福島善三氏。4月14日～20日はそごう横浜店、5月19日～25日はそごう千葉店で個展が開催される予定。



にまで増えている。そんな背景を語るには、「ちがいわ窯」一六代目の陶芸家・福島善三氏だ。

豪雨から二週間後、福島氏は重要無形文化財「小石原焼」保持者、すなわち人間国宝の認定を受ける。周辺二二軒の窯元が被害を受けた中であつては、光差す朗報だった。小石原焼は一般的に日常で使うための雑器、民芸品としてとらえられていただけに、作品として評価される人間国宝認定に福島氏は、喜びと同時に驚きをもったという。

窯業地としてあらためて注目さ

「身近にあるものの魅力は、なかなか気づきにくい。東峰村にはまだまだ宝が眠っているはず」と話す、宝珠山ふるさと村専務取締役の大坪勝二氏。宝珠山ふるさと村が開発した商品の一部。左から「柚子と米酢のドレッシング」「柚子ジンジャー」「村の柚子ポン酢」。



を利用した宿泊施設、キャンプ場などを九州北部各地で案内し、手応えを感じていた矢先に村は濁流に飲み込まれた。

再建を断念した施設もあったほどの被害のなか、商品の加工場だけは影響を受けなかったため、一週間後には出荷を再開。その後の復興イベントへの出店が、前進する力となった。

「毎週のように販売に向き、それをきっかけに新しい取引先が増えました。売り上げが増え、村や商品の認知度も上がってきました。まずは福岡県内で地盤を固めてから、さらに県外への出荷へつなげていきたいと思っています」

棚田親水公園、岩屋湧水、キャンプ場などの施設は再スタートを

きり、現在は棚田の景色を望める宿泊施設の計画が進められていると、大坪氏は顔を輝かせた。

特産品のシイタケが

東峰村の

ファンを増やす力に

宝珠山ふるさと村とも連動し、シイタケで東峰村の名を広めようと数々のチャレンジを重ねているのが、「農事組合法人宝珠山きのこ生産組合」。その要は曾祖父の代から続くシイタケ栽培を継ぎ、農学博士の肩書を持つ理事の川村倫子氏だ。

組合のシイタケ栽培は、粉砕した樹木などからつくられる完全無農薬の菌床ブロックに菌を植え付けることから始め、温度や湿度の管理を徹底したハウスのなかで三〜四カ月かけ、シイタケはゆつくりと肉厚に育っていく。現在は東京の百貨店との取引もあるが、原木シイタケ栽培にこだわる消費者が少なくなく、苦労を重ねてきたという。

「菌床に何が入っているかわからない、という漠然とした不安か

らか、原木栽培信仰が強いんです。それを打破するため、農学部で学んだ経験が幸いしたと思います。自信を持って菌床栽培の安全性と魅力を科学的に説明することで、だんだんと信頼してくださる方が増えてきました」

その信頼を、東峰村の存在が陰ながら支えたのが興味深い。「市や町ではなく、村であることがブランドになるんです。自然が豊かで素朴なイメージや、安心感がある。村で良かったと思いたね」

イメージだけではなく、食の安全や環境保全に取り組み農場に与えられるJGAP（ジェイギャップ）の認証を得、輸入菌床ブロックとの差別化のために、福岡県産の認証シールを貼るなど、確固たるブランド化にも努める。調味料や菓子など、シイタケを使った商品も開発された。

川村氏の活動はそれにとどまらない。地元を元気にする目的で村の女性たちが世代や職



宝珠山きのこ生産組合理事の川村倫子氏。全国各地で行われるイベントへの参加を重ねながら東峰村の認知度を上げて地盤を固め、将来的には地元でそうしたイベントを開催したいと意気込む。

業を超えて集まった、「東峰ムラガールズ」のメンバーでもある。福岡市内にアンテナショップを開店したのに加え、バスツアーなどイベントも企画してきた。

「東峰村の景色やおいしいものを、多くの人に知ってほしい。さらには、私たちに代わって村の魅力をPRしてくださる東峰村のファンを増やしていくのが大切だ」と思い、取り組んできました」

豪雨の際には菌床ブロックのハウスなどが大きな被害を受け、一時期は出荷も危ぶまれていたが、一カ月後にオンラインショップを復活。商品はオリジナルキャラクターの手ぬぐいしかない状況だっ

菌床ブロックで栽培されたシイタケは地元の女性たちにより丁寧に選別、袋詰めされて出荷される。左はサイズの小さなシイタケを乾燥させた商品。



「ものの、反響は予想以上に大きかったという。」

「東峰村と聞き、いても立ってもいられなくて注文したなど、コメント欄に書かれたメッセージを読みながら涙があふれました。たくさんの方たちが東峰村に思いを寄せてくれているとわかり、本当にありがたかったですね。この思いに何とんでも思え、恩返しをしたいと思いました」

施設があらたに整った今は、エネルギーギッシュに活動を再開。しいたけカレー、柚子胡椒をアクセントにきかせたアヒージョなど、あ

らたな商品も生まれている。

「逆境ではあったものの、ニュースを通して東峰村の名が全国に知られるようになりました。村内でも水害への受け止め方はそれぞれだと思いますが、私自身は村の知名度が上がったことを前向きに捉え、これからも村の魅力を発信していきたいと考えています」

山間を彩る美しい棚田を未来へと継ぐために

集中豪雨でもっとも大きな被害を受けた東峰村の宝が、村内にある棚田だった。田畑の土が流されただけではなく農業機械や水路なども土石流の被害を受け、離農を考える人もいたなか、若手の有志が集まり、棚田復活のために立ち上がったのが「東峰村棚田まもり隊」だ。

代表を務める和田将幸氏は、その発足をこう振り返る。

「災害前の自分たちは、村のこつとや米作りを親の世代に任せがちで、この東峰村のことを真剣に考えていなかったような気がします。農業に携わる人の高齢化をは

じめ数多くの課題があることはわかってはいたはずですが、自分たちのこととして向き合っていかなかった。しかし、災害をきっかけに、自分たちの世代が動かなければ、東峰村の農業は立ち行かなくなるという強い危機感が募ったんです。今回の災害は、時計の針を一〇年早めたと思っています」

災害から四カ月ほどたった十一月、活動の突破口として棚田親水公園で開催したのが、「ちいさな収穫祭」というイベントだ。地元食材を使った鍋料理や新米のおにぎりがふるまわれ、野菜の販売器をつくるろくろ体験なども行われたと話すのは「東峰村棚田まもり隊」事務局の梶原寛暢ひろのぶ氏だ。

「災害の際にはボランティアをはじめ本当に多くの人たちに助けていただいたので、このイベントで感謝を伝えたいという思いがありました。さらには東峰村には実りがある、おいしいものがある、元気も失っていないという発信がしたかったんです。イベントが

終わったとき、皆が笑顔だったのが今でも忘れられません。あれほどの災害の後でしたが、あの日の僕たちは笑っていました」

一時的なイベントで終わらせることなく、農業を観光にする形で訪れる人たちと継続しながら絆を深めて交流人口を増やしていきたいと、二〇一八年からは田植え体験を実施。災害前からおいしさに定評があった棚田米は、親類縁者に配ってほぼ終わっていた状況を変え、積極的なPRや販売も行われるようになった、と梶原氏は語る。

「あの災害がなければ会話をし



「東峰村棚田まもり隊」代表の和田将幸氏（右）と、和田氏を支える事務局の梶原寛暢氏。棚田米の売り上げの一部は現在、村の復興支援に使われているという。

JR 日田彦山線筑前岩屋駅～大行司駅間には写真の「宝珠山橋梁」を含む3つのめがね橋が架かる。年末のライトアップや四季折々の景色が彩る姿を求め、災害前は多くの鉄道ファンや観光客が訪れていた。



村の北部には樹齢二〇〇〜六〇〇年と伝えられる杉の巨木群が約五ヘクタールにわたって広がる。写真は巨木群のなかでも威風堂々とした大きさを誇り、林野庁による「森の巨人たち百選」に選定されている「大王杉」。このあたりはかつて修験の場だったといわれる。

ないで終わったかもしれない人たちを含め、災害をきっかけに広く意見を聞くようになりました。正直なところ、くじけそうになることもありました。亡くなった方がいるのに何もなかったらそれこそ申し訳が立ちません。これに負けてはいけなないと、いつも仲間と話しています」

和田氏が続ける。

「災害を機に、同年代はもちろん、年配の人たちや村長とも腹を割って話すことが本当に増えました。いろいろな取り組みが一つずつ実を結び、自分たちの行動が状況を好転させるきっかけとなればという思いは強いですね」

現在は「東峰村遊休農地活用プ

ロジエクト」として休耕田にさつま芋を植え、宮崎県の焼酎蔵で芋焼酎を仕込む試みが進められている。さつま芋に加えて米や水も村から運び、この春に完成予定だと梶原氏が笑顔を見せた。

「原材料が東峰村産の焼酎なら、村でつくった器で飲めたらいいのではないかと、小石原焼の焼酎の器との限定セットの販売も決まっています。以前は、イベントなどで、小石原、宝珠山と、合併前の地区ごとにわかれて行われることが多かったのですが、このプロジェクトはオール東峰村！村全体がまとまったら、いったいどのぐらいの力が出るのだろうかを期待しています」

うれしそうに語る梶原氏の言葉を、和田氏が継いだ。

「焼酎ができたなら、田植えや収穫に来てくださった村外の方々と一緒に飲みたいですね」

復旧ではなく復興を目指し 東峰村のチャレンジは続く

和田氏、梶原氏のひたむきな姿を目の当たりにして思い出したのは、独自の表現を生み出すために幾度となく試行錯誤を重ねたという陶芸家の福島氏の話だ。

「技をそのまま受け継ぐのが伝承だとすれば、伝統とは、今までのものに自分がプラスアルファでなにかを足しながら、時代とともに変わり行くものなんです。器を作るには、粘土づくりから焼き上がるまで何カ月もかかりますが、途中で全部廃棄してやり直すことも珍しくありません。新しいものをつくる、なにかに挑むということとはそういう苦労があります。でも、その積み重ねが未来への糧、あたらしい伝統を生むことにつながるんです」

この先にどんな困難があったと

しても、東峰村で今行われているさまざまなチャレンジは、福島氏の言うあたらしい伝統を各分野で生み出すことにつながるのではないだろうか。

村を歩いてお会いした方々の多くが、目指すのはもとの状態に戻す復旧ではなく、将来に向けたあらたな村の形を作る復興だと話していたのも印象深かった。村長の澁谷氏の話もまた、胸に深く刻まれている。

「若い世代には、東峰村を受け継ぐあなたたちがこれからの村をつくっていくのだと、言っています。景観や特産品を生かしていけば、必ずできると」



村の人々の毎日の移動を支えていたJR日田彦山線は、東峰村内の3つの駅を含む添田駅～夜明駅が復旧していない。